

上臈局本『源氏物語』写しの二本をめぐって

中 城 さと子

【要旨】

第一項では、上臈局本が書入文明本（文明本の書入れの入った状態での本文を仮称）の清書的書写によって成立していることを論じる。第二項では、紅梅本『源氏物語』の兄弟本である熊本大学教育学部本『源氏物語』の紹介をする。第三項では、二本を書写した人物を調査する。紅梅本の付箋の記事および『実隆公記』の記事の二様の調査を行う。その結果、二人の候補者に辿り着く。どちらが書写者かということでは、紅梅本若菜下の貼り紙の筆跡の調査を通して付箋の記事にあった人物が書写者という結論を得る。紅梅本東屋の貼り紙の検討では、兼良の所持本について触れることとなった。

はじめに

「三条西家の家本『源氏物語』について」という拙論⁽¹⁾に次のように書いた。

今日見る三条西家本（日大本）の根幹には実隆一筆本Aがあると推測され、そのAの明応四年時点での姿は、南御方本を転写した日高本によつて知ることができると判明した。日高本の現所蔵者は分らないが、『源氏物語大成』（以下、『大成』）に奥書と若干の解説が見られる（注）解説は池田亀鑑氏による。普及版第二冊七八頁。いつの日か、日高本が世に出て調査される日がくることを待望する。

それから約一〇年余り経ち、この日高本が「紅梅文庫旧蔵本」（略称「紅梅本」）として出現し、上野英子氏著『源氏物語 三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相』（武蔵野書院、二〇一九。以下、「上野著」とする）で報告がなされた。この度、現所蔵者である上野英子氏から「新出資料 紅梅文庫旧蔵本を中心とした三条西家本源氏物語本文の再構築に関する研究」についての研究会の会員に閲覧を許可された。そこで、改めて三条西家の家本『源氏物語』に関連することを調査したい。そして、これを機に実隆一筆本Aと称していた本を上野氏にならない、「文明本」と呼ぶこととする。

一 上藤局本『源氏物語』

まず、紅梅本を一見して、想像外に書入れが少ない事に戸惑う。文明本から上藤局本への展開は、河内本系・別本系から青表紙本系への変遷

であり⁽²⁾、河内本系・別本系の本文を削ぎ落とし青表紙本系へ転換させるものであったからには、文明本には多くの書入れがなされ（書入れの入った本を「書入文明本」と仮称する場合がある）、書入れられた文明本を写した上藤局本そしてその転写本である紅梅本であつてみれば書入れが相当あつて然るべきである。だが、その予想は見事に裏切られた。そこで紅梅本の実態から推測されるのは、上藤局本または紅梅本の二本のいずれかの書写段階で清書の書写がなされた、ということである。次頁以下で取り上げる紅梅本の兄弟本「熊本大学教育学部旧蔵本」（略称「熊大本」）の本行本文が紅梅本と同一視できる状況からは、清書の書写を行ったのは、この二本の親本である上藤局本であると判断され、清書の書写を行つて書入れが整理された上藤局本を書写した二本の書入れが想像外に少ないというわけである。

こう推測すると、書入れの多い文明本を上藤局がどのようにして清書的に写しえたのか、とまた疑問が沸いてくるが、連綿の切れ目を設け時々立ち止まる慎重な運筆で、書入れに従い写しえたのであろう。

二 熊大本『源氏物語』

紅梅本『源氏物語』に兄弟本がある。それは熊大本『源氏物語』である。孤本と思つていた紅梅本に兄弟本が見いだせたのである。この兄弟本の記事は、伊井春樹氏編『源氏物語 注釈書・享受史 事典』五二六頁下欄に載せられていた。編著の刊行された平成一三年2001から二〇年経つ。なぜ今（令和三年2021）まで気付かなかったのか。早速調査すると、「新日本古典籍総合データベース」で見られる状況にあつた。その画像は、平

成二年1990一二月の撮影とある。撮影時から約三〇年経つ。何と長い間、この熊大本は身を潜めてきたことか。撮影での照明を受けて約三〇年後、やっと紅梅本を研究する人々との出会いが生じ、再び注目のライトを浴びる。該書に巡り会えた僥倖に感謝し、該書の調査には、心して当たりたい。

(一) 熊大本『源氏物語』

熊大本は、紅梅本と同じ奥書

此物語五十四帖以待従大納言実卿／自筆本上藤局入法雲院／左大臣女ノ手自被書／写者也深秘不可遣他所而已／明応四年六月一日／李部王判

を持つ。前掲の奥書に続いて、次の識語もある。

源氏物語御尋問之折節／幸随分之本所持仕之間／家久様進上申以訖
／慶長十二年正月吉日／新納武蔵入道為舟⁽³⁾

識語によると該書は、新納武蔵入道為舟なる人物が主君である家久に進上した本である。紅梅本と同じく列帖装の枳形本であり、虫害が多いが五四帖揃っており、紅梅本の欠である蓬生・若菜上の二帖、補写された総角の計三帖もある。

紅梅本の奥書と熊大本の奥書が同じであることを述べたが、詳細に比較すると、紅梅本にある「本云」が熊大本にはない。上藤局本の奥書を写すにあたっては、「本云」があつて然るべきであるのに欠落している。

(二) 新納武蔵入道為舟

識語の記主、新納武蔵入道為舟は、名を忠元といい、為舟は主君島津

義久から賜った号⁽⁴⁾ということであるが、その際に出家もしているので法名⁽⁵⁾ともいえそうである。

大永六年¹⁵²⁶に、島津一族の庶流に誕生、天文七年¹⁵³⁸一三歳で島津忠良に出仕、以降は貫久・義久に仕える。智勇兼備の武将で、鬼武蔵と称され、秀吉征西の際(天正一五年¹⁵⁸⁷)の降伏時に出家。文祿三年¹⁵⁹⁴に上洛、紹巴・昌叱らと一座を共にする。古典学も修め、幽斎の指導も得た。和歌・連歌・漢詩に通じ、編著に『忠元連歌』『幽斎添削連歌百韻』『玄旨訂正詠歌』『忠元上洛日記』『源氏物語聞書』『花宴聞書』があり、「詠歌大概抄」なども書写している。慶長一五年¹⁶¹⁰に死去。享年八五。

(三) 島津家久

次に、この本の所持者であつた島津家久について考えたいが、島津家久は二人いる。家久①は、天文一六年¹⁵⁴⁷、島津貴久の四男として生まれた戦国時代から安土桃山時代にかけての武将であり、島津氏の家臣である。天正一五年¹⁵⁸⁷六月五日急死。享年四一。熊大本の識語にある慶長一二年¹⁶⁰⁷は家久①の死後にあたるので、識語にある家久にこの人物は該当しない。家久①は家久②の叔父にあたり、『家久君上洛日記』を残しているが、上洛中に紹巴の源氏若紫講釈の聴聞したことを記しているなど興味深い記事がある。前項に挙げた『忠元上洛日記』は、文祿三年¹⁵⁹⁴に主君義久の上洛に随った際のものであり、上洛中の記事がなくその動静が掴めないが、都人との交流などについては『家久君上洛日記』が参考になる。

該書を進上された家久②は通称忠恒という。安土桃山時代から江戸時代前期の武将で外様大名である薩摩藩の初代藩主である。戦国大名とし

て島津氏を成長させた貴久の孫にあたり、義弘の子である。家康の「家」の一字をもらって家久と改名するが、同名の叔父が存在するため、忠恒で呼ばれることが多い。家久②は、武人として活躍する一方、和歌・連歌・茶の湯を嗜んだとされ、『源氏』についても心得る必要があつて忠元に下問したのであらう⁽⁶⁾。

(四) 二本の書誌的比較

既にふれたことを含め、紅梅本と熊大本の書誌を示す。

形態	紅梅本	熊大本
枅形本・列帖装	枅形本・列帖装	枅形本・列帖装
表紙寸法 ⁽⁷⁾	縦18・0 cm×横18・4 cm	縦約16・0 cm×横約18・0 cm
表紙	紺色無地	紺色無地か
題簽	紅色無地で表紙中央に貼付	上部に臥竜らしき箔押しを裁断した模様があり表紙中央に貼付
題簽の筆跡	本文と同筆	本文とは別筆で男性によるか
本文の筆跡	五一帖一筆	五四帖一筆 ⁽⁸⁾
欠帖	蓬生・若菜上	なし
補写	総角	なし
行数	一〇行	一〇行
一行の字数	12〜20	12〜20
異文注記	多い	少ない
付箋	行幸に一つ	なし
貼り紙	若菜下・東屋に各一つ	なし

奥書	書写者の筆	書写者の筆
識語	なし	新納忠元筆
虫害	少ない	多い
装丁	列帖装、糸切れあり補綴	列帖装、糸切れあり補綴か

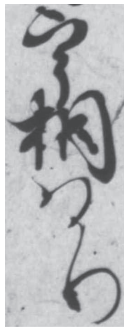
(五) 紅梅本と熊大本の筆者は同一人物

書写年が離れているらしく、紅梅本に比べて熊大本は字の大きさが大きく目であるにも関わらず行数はどちらも一〇行であり一行の字数はほぼ同じであるので、熊大本の紙面はどうしても行間が少なくなり、字形が横に膨らむ。紅梅本の紙面が整然としているのに対して、熊大本は全般的に緊張感が伝わらず、一見、別筆かと思われそうである。しかし、二本は次の1. 2. 3. 4. の癖字あるいは特徴を共有している。よって、同筆である可能性が高い。例は多いが、それぞれの例を一例ずつあげるに留める。その際、『大成』での該当の位置を「*」印を付して示しておく。

1 「宰」の特殊な字形（ウ冠の下に「う」が書かれている）を共有している。蚩から例示する。

八〇六頁⁽⁷⁾なくよせおもきなともおさく…御をちなりけるさい*
将はかり

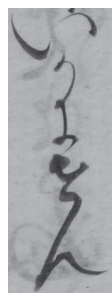
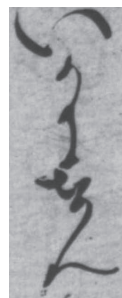
熊大本 No. 1079 ⑮ 「宰相はかり」 紅梅本 25—0005 ⑮ 「宰相はかり」



2 平仮名「ん」の終筆が跳ね上がらず、短い場合が多い。これも蜚から例示する。

八〇五頁④ひのほかなる思ひそひていかにせむとおほしみたる
めれ

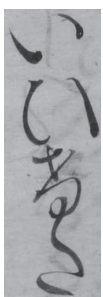
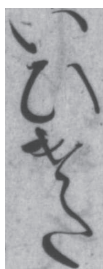
熊大本 No. 1077 ⑦「いかにせん」 紅梅本 No. 25—0003 ⑦「いかにせん」



3 平仮名「ひ」の終筆が長い場合が多い。帚木から例示する。

三五頁①ひかる源氏名のみことくしういひけたれたまふ

熊大本 No. 43 ①「いひけた」 紅梅本 No. 02—0003 ①「いひけた」

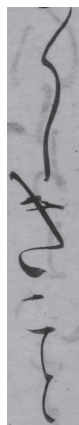
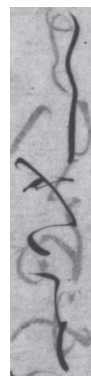


この例では終筆が外側に張っているが、真っ直ぐに引かれている例もあり、両方とも多く見いだせる。また、底打ち後、上方へ運筆する途中で線が細くなる特徴も共通している。

4 平仮名「き」の一画目と二画目が接近していて、三画目が長いので特徴のある字形となっている。蜻蛉から例示する。

一九三二頁③くしきことおほしよらむ*

熊大本 No. 2580 ④「くしきこと」 紅梅本 No. 52—0006 ④「くしきこと」



これらの字形の相似・特徴からも、二本が同一筆者の手になると推測される。ただし、上野氏は、口答発表で、異筆である可能性の高い一四の巻を指摘され⁽⁹⁾、それ以外の巻は紅梅本と同筆とされた。稿者とは筆者に関して多少のズレがあるものの、いずれにしても、紅梅本と熊大本の筆者が同一人物である多くの巻があることになる。あるいは熊大本には二人目の筆者がいるのかもしれないが、紅梅本と熊大本の多くの巻に同一人物が筆を執ったことは確かである。

なお、齋藤鉄也氏の「仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付けの調査——書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本を中心とした写本との比較を通して——」⁽¹⁰⁾によると、紅梅本⁽¹¹⁾・熊大本⁽¹²⁾のそれぞれが一筆であること、書本は共通であること、二本の字母遣いが異なることを指摘されている。齋藤説に拠れば、熊大本が書本の字母に縛られずに書写し、紅梅本が字母も写しとったということであろうか。

(六) 題簽について

あまり題簽に注目することもなかったにも関わらず、熊大本の題簽に目がとまった。これは確か、吉川本と同じではないのか。確かめると、思った通りであった。さらに、大島本の題簽も同じだということを、沼尻利通氏に御教示いただいた。

1 熊大本題簽の制作時期

紅梅本は題簽に赤の無地紙を使用している。このことから書写者本人用の本ではないかと推測されていて⁽¹³⁾、字形から題簽の字は物語本文を書いた書写者が自ら筆をとったものと推測される。

熊大本も表紙中央に題簽を付す。題簽の上部には、竜を刷ったものを裁断した模様がある。巻名を記す題簽の字は五四冊同筆である。

上野氏は、紅梅本について「ほぼ全冊を一人で(筆跡から見ても女性)丁寧⁽¹⁴⁾に書写し、底本の奥書はそのまま転写したものの、新たな奥書・識語の類は一切つけなかった。全冊同質の非叩解紙に、表紙・見返し等の装幀も地味で、紺無地の朱色題簽を押した点などは趣向を感じさせるが、決して豪華では無い。まるで複本のような」本である、と報告しておられる⁽¹⁴⁾。この紅梅本と比較して熊大本の題簽用紙は、豪華本の吉川本と酷似しており、熊大本が筆者自身用の本ではないことを思わせる。

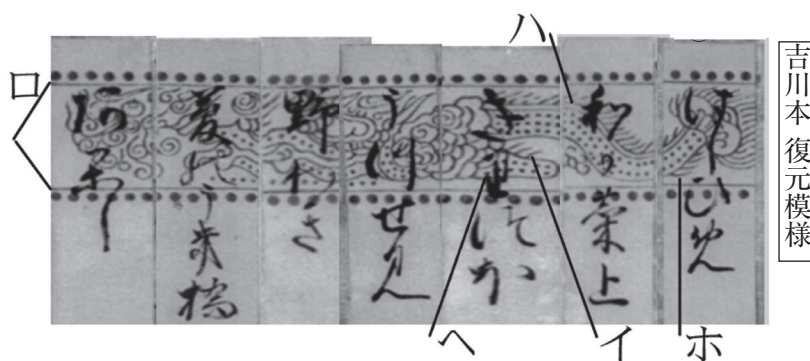
題簽・色紙の竜模様のなかに熊大本のものと明らかに異なっていると分かるものもあり、これらを除外すると、一見では同じ竜模様に見える八例が残る。この八例(①近衛植家色紙(植家(1502~1566)) ②熊大本③吉川本 ④大島本 ⑤梶井蜻庵色紙⁽¹⁵⁾(蜻庵(1531~1598)) A ⑥梶井蜻庵色紙B ⑦細川玄旨幽斎色紙(幽斎(1534~1610)) ⑧後水尾院色紙(後水尾(1596~1680))を比較する⁽¹⁶⁾。

イ 足のくびれ	ナシ	①②③④⑤⑥
ク	アリ	⑦⑧
ロ 模様	上下線あり	①②③④⑤⑦⑧
ク	なし	⑥

ハ 上ヒレの数	20本前後	②③④
ク	13本前後	⑥
ク	11本前後	⑤⑦⑧
ク	10本前後	①
ニ 胴体中の○の数	70以上	②
ク	60以上	①③⑧
ク	60以下	④⑤⑥⑦
ホ 尾の先の下ヒレ	7本	②
ク	4本	③④
ク	3本	⑤⑦⑧
ク	0本	①⑥
ヘ 後足の下	3本	②
ク	1本	③
ク	0本	①④⑤⑥⑦⑧

「イ」から⑦⑧は明らかに他とは版が異なる。後水尾(1596~1680)の生没年から⑧を江戸前期の制作と、また⑥に似ることから⑦を幽斎(1534~1610)の晩年での制作と考える。

「ロ」・「ヘ」において、同版であろう②③④を比較すると、「ニ」の数値には数え間違いがあるかもしれないので判断の対象から外せば、「ヘ」において、②熊大本、③吉川本、④大島本の順に毛の数が減っている。版の摩耗による差が生じたかと判断されるので、②熊大本の題簽の制作時期が最も早期であり、三本の題簽の制作年は、熊大本、吉川本・大島本の順であろう。題簽の制作年は、吉川本が永正一七年¹⁵²⁰頃であり、熊大



本の題簽制作は永正一七七年を遡ることとなる。大島本の題簽制作の時期は、「二」を考慮すると永正一七七年を下ると推測される⁽¹⁷⁾。

余談ながら、吉川本の題簽筆者として実隆の名が「源氏五十四帖目録次第付」に五四枚中二三枚に挙がっていて、残りは中院通茂（寛永八年1631～宝永七年1710）とする⁽¹⁸⁾。吉川本の題簽筆者を二者とする記載から岡野道夫氏は、落ちた分を江戸時代になって補ったと推測されている⁽¹⁹⁾。吉川本の復元模様の「へ」において、0本のものが見つければ、岡野説でもいけるかもしれない。稿者は、実際には吉川本を拝見できていないので強くは主張しないが、字形から筆者を五四枚とも実隆ではないかと推測している。

2 熊大本の成立時期

吉川本『源氏』には、河内本の本文を持つ写本（吉川史料館蔵）と青表紙本の本文を持つ写本があるが、熊大本の題簽との関係で取り上げているのは後者であり、山口県岩国市の岩国徴古館での所蔵を経て、現在は吉川史料館に所蔵されている五四帖の寄合書きである。

吉川本の成立については、永正一三年¹⁵¹⁶から一四年¹⁵¹⁷ころの成立とする説⁽²⁰⁾、上野著二六三頁以後に述べられている永正一七年¹⁵²⁰説があり、稿者は、上野氏説を支持したい。同氏が挙げておられる『実隆公記』（以下『公記』）永正一七年四月二日条の「源氏物語奥書〔陶兵庫本〕」、其外外題等事所望。」の記事の「陶兵庫本」が、吉川本に該当する⁽²¹⁾と判断するからである⁽²²⁾。

熊大本の題簽が吉川本の題簽よりも遡る制作と考えられることを前項で述べた。おそらく熊大本自体の成立も吉川本の成立した永正一七七年を

遡ると考える。それをいつ頃と考えるべきかは後に述べる。

3 熊大本の題簽筆者

吉川本の題簽については、筆跡からは実隆一筆としてもよいのでは、ということを経述したが、これに対する熊大本の題簽の筆者は、実隆ではない感触を受ける。実隆筆よりも大胆で穂先のよく効いた息の長い筆遣いの能書であり、男性的な筆跡である。

熊大本の題簽の「や」は、後に取り上げるような紅梅本若菜下の貼り紙に見られた特徴がない。そこで、「や」にこだわらず題簽から特徴的な字形をさがせば、「ふ」「せ（勢）」「ま（万）」「ほ（本）」「こ（古）」「き」に特徴を見いだせる。よって、これらの字について調査したい。「人物」は、勧修寺藤子（筆者候補として後に取り上げる）の配偶者「後柏原天皇（勝仁親王）」、一位殿（筆者候補として後に取り上げる）の兄である飛鳥井雅俊、近似する題簽用紙を持つ吉川本の成立に関わった三条西実隆および後継者公条、上臈局の配偶者である伏見宮邦高親王、雅俊姉が近衛政家の側室であった⁽²³⁾縁により近衛尚通を選ぶ。

まず、筆跡を判断するための「資料一覧」を挙げる。そして、その後で、その資料の妥当性を検討し、次に、題簽の字についての筆跡調査をする。

資料一覧

筆者	資料	
A 尚通	和歌短冊「きのふたに」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)	O 実隆
B 雅俊	吉川史料館『源氏物語』(青表紙本) 花散里	P 後柏原
C 実隆	高松宮家本『源氏物語』松風(高松宮御藏河内本源氏物語臨川)	Q 後柏原
D 公条	日本大学蔵本『源氏物語』桐壺	R 邦高
E 雅俊	和歌短冊「寄月／田家」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一七号)	S 邦高
F 雅俊	市立米沢図書館蔵『後撰和歌集』	T 実隆
G 後柏原	和歌短冊「暮春」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録二四号)	U 後柏原
H 後柏原	和歌短冊「冬月」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)	V 後柏原
I 後柏原	和歌短冊「昔おもふ」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録五号)	W 後柏原
J 後柏原	和歌短冊「相おもふ」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一〇号)	X 後柏原
K 後柏原	和歌短冊「不逢恋」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一七号)	Y 実隆
L 尚通	和歌短冊「音にのみ」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)	Z ¹ 後柏原
M 実隆	和歌短冊「はつせ山」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)	Z ² 実隆
N 実隆	和歌短冊「きえかへり」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)	Z ³ 尚通

和歌短冊「あり明の」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)

海に見える杜美術館蔵御消息「ただいまのはな」

図書寮文庫蔵後柏原天皇宸筆朗詠御色紙幅「月に薄絵入」

吉川史料館『源氏物語』(青表紙本) 夢浮橋

慶應義塾ミュージアム・コモンズ和歌短冊「夕薄」(センチユリー

赤尾コレクションAW—CEN—001185-0000)

和歌短冊「思かね」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)

和歌短冊「龍田河」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録三一号)

東京国立博物館蔵「和歌懷紙」「詠每家有春和歌」

京都国立博物館蔵「後柏原天皇宸翰懷紙(月多遠情ほか)」

和歌短冊「初恋」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一〇号)

和歌短冊「をしなへて」(思文閣へ古今名家▽筆蹟短冊目録一六号)

根津美術館蔵「瀟湘八景和歌」

日本大学蔵本『源氏物語』花宴

吉川史料館『源氏物語』(青表紙本) 桐壺

調査方法が目視なので判定基準が明確にならない懸念があるが、次の

ようにする。

無印……………同筆の可能性が高い

() 付き……………似ている

△ △ 付き……………似ていなくもない

×印……………同筆である可能性が低い

所在箇所を示すのに、丁数と行数で示したり、公開されているファイル№であったり、と一定していないのをお許しいただきたい。なお、同じ作品内では任意に調査を中断している場合があることをお断りしておく。なお、太字記号の資料は、二〇二一年現在のウェブサイトで見られる。資料として用いた書跡には、掲載が難しそうなものについてはその掲載を省略し、許可の出るものを挙げるに留まることをお詫びする。

資料の妥当性

調査した「資料一覧」のうち、「思文閣へ古今名家ノ筆蹟短冊目録」のもの、およびS・Z¹は署名があるので真蹟であろう。東京国立博物館蔵・京都国立博物館蔵・図書寮文庫蔵・海の見える杜美術館蔵のものも筆者に誤りはないであろう。Dの公条筆・Z²の実隆筆も字形から真蹟である。残る吉川史料館蔵『源氏物語』（以下「吉川本」）桐壺・花散里・夢浮橋の筆者は「極め」に、市立米沢図書館蔵『後撰和歌集』の筆者については「伝承」に、それぞれがよるようである。ここで、念のため、吉川本桐壺・花散里・夢浮橋、市立米沢図書館蔵『後撰和歌集』について、それぞれの筆者に間違いがないかを調査しておきたい。

イ 吉川本桐壺の筆者は近衛尚通で正しいか

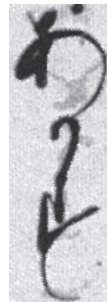
短冊目録一六号所載の二点の短冊の尚通の字と桐壺の字を比較すると、次に示すとおり特徴のある字形の「す（寿）」の一致と第二画が左上から右下へ傾く特徴の一致する「お」が見られる。この二字の字形の一致により、吉川本桐壺の字は尚通の短冊の字と一致しているといえる。

つまり、吉川本桐壺の筆者は、極めの通り尚通としてよい。

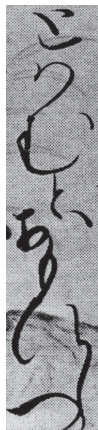
○ 尚通筆短冊「衣ほす」



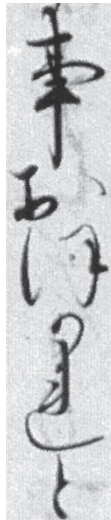
桐壺1ウ②「あかす（寿）」



○ 尚通筆短冊「とはむとおもひしつ」



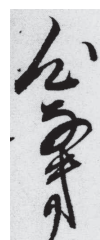
桐壺2オ③「事おほかれと」



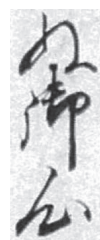
ロ 吉川本花散里の筆者は飛鳥井雅俊で正しいか

短冊目録一七号の雅俊の字と花散里の字を比較すると、次に示すとおり、第一画が長い点に特徴のある字形の「心」の一致が見られる。

○雅俊筆短冊「心なき」



花散里1才①の「御心」

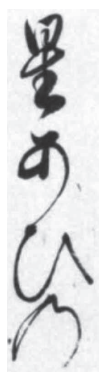


この「心」の字形の一致により、吉川史料館蔵『源氏物語』花散里の字は雅俊の短冊の字と一致しているといえる。つまり、吉川史料館蔵『源氏物語』花散里の筆者は、極めの通り雅俊としてよい。

ハ吉川史料館蔵『源氏物語』夢浮橋の筆者は伏見宮邦高親王で正しいか

邦高親王筆「和歌懷紙七夕」(センチュリー赤尾コレクション)の「あ」と吉川本夢浮橋の「あ」を比較すると、次に示すとおり、第二画が直下する特徴のある字形の「あ」の一致が見られる。

○邦高筆和歌懷紙「星あひの」



夢浮橋2才①「あかつきにも」

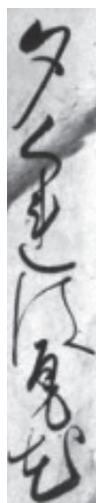


邦高親王筆「和歌懷紙七夕」(センチュリー赤尾コレクション)および「和歌短冊夕薄」(同)の「は」と吉川本夢浮橋の「は」を比較すると、次に示すとおり、「は」の字形の一致が見られる。

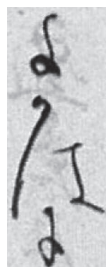
○邦高筆和歌懷紙七夕「にはのと」



邦高筆和歌短冊「夕くれは尾花」



吉川本夢浮橋1才③「よかはに」



「あ」「は」の字形に一致するものがあるので、吉川本夢浮橋の筆者は極めのとおり邦高親王としてよい。

ニ市立米沢図書館蔵『後撰和歌集』（米沢本後撰集）の筆者は飛鳥井雅俊で正しいか

調査「ロ」により、吉川本花散里の筆者は飛鳥井雅俊であるとしたので、これと『後撰和歌集』の字を比較すると、次に示すとおり、字形に似たもの（人・し・ぬ）がある。そして、「や」の最終画が通常よりも右寄りに引かれる特徴を持つものが花散里に一例、後撰和歌集にも多く見られ、これを共通の特徴といえそうである。さらに「ひ」の第一画を点で書く場合が多い点も特徴といえる。やはり同筆としてよい。

○花散里1才①「人しれぬ」

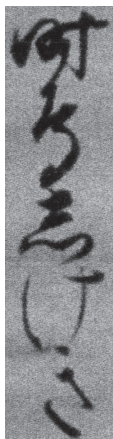


後撰和歌集No.25⑬「夜人」



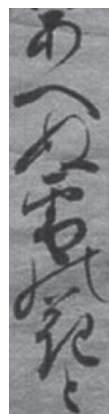
○花散里1才①「人しれぬ」(画像既出)

後撰和歌集No.27⑳「時鳥しけき」



○花散里1才①「人しれぬ」(画像既出)

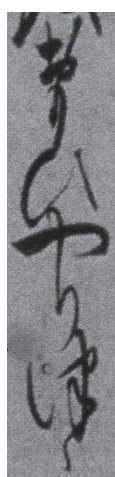
後撰和歌集No.3⑨「あへぬ(・)雪の花と」



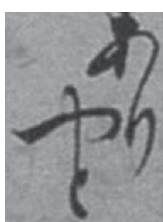
○花散里3ウ5「かやうの」



後撰和歌集No.202⑭「おもひやりつゝ」

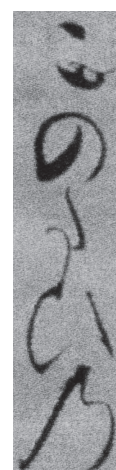


後撰和歌集No.131①「ありやと」



○花散里1才⑨「給ひて」





以上で資料の妥当性についての調査を終え、次に熊大本の題簽の筆跡調査をする。

「題簽の仮名「ふ」「せ(勢)」「ま(万)」「ほ(本)」「こ(古)」「き」の筆跡調査」

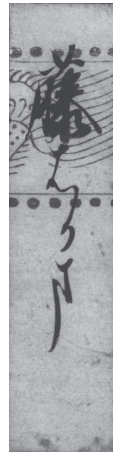
対象	「ふ」	「せ(勢)」	「ま(万)」	「ほ(本)」	「こ(古)」	「き」
題簽 卷名	あふひ・よもきふ・こて ふ・にはふ宮・かけろふ	勢きや・ゑあは勢 ・松か勢	たまかつら・藤はかま ・まきはしら	きりつほ・夕かほ・あ さかほ・ほたる・まほ ろし・にはふ宮	こてふ・よこふえ ・こうはい	きりつほ・は、き、 ・よもきふ・夕きり
後柏原	Ⅰ(J) △K V G (Z) ¹	×U ×V	(P)	G (H)	△Q V △W V (X)	△K V
雅俊	B 6ウ② △C No. 7 ⑪ V (E) (F No. 3 ⑬)	(B 1オ⑨、2ウ①) (F No. 6 ⑩)	B 2ウ①、3オ②、4 オ④ (F No. 3 ④)	B 1オ③ E	(B 1オ②、4ウ⑧) △F No. 7 ⑦ V	(B 5ウ③) (F No. 29 ⑮)
実隆	(M) △N V (Z 4ウ②) ²	(T)	△N V (C 17オ⑧)	(D 題簽) △O V	△Y V Z 12オ② ²	△Z 9ウ⑧ V
公条	(D 1オ④)	(D 8ウ⑥)	△D 13オ③ V	(D 4オ⑤)	△D 22オ③ V	△D 10オ⑩ V
邦高	S	S・Rに用例なし	R 1ウ⑤、(R 3オ⑦)	△R 2ウ③ V	(R 1オ⑨)	△R 2オ⑨ V
尚通	A、Z 1オ④⑥⑩ L	(Z 5ウ②、11ウ②) ³	△Z 7オ⑨、19ウ⑦ V	△Z 5オ⑦、7オ⑨ V	(Z 12ウ⑤、21ウ⑩) ³	△Z 4オ⑤ V (7オ⑨) ³
考察	「ふ」について同筆の可能性が高いと判定した後 柏原・雅俊・邦高・尚通 が題簽筆者の候補となる。	「せ」は、後柏原の 字が似ていないの で後柏原が後退す る。	「ま」については、尚 通の字が類似度が低い ため、雅俊・邦高が題 簽筆者の候補として残 る。	「ほ」をふくめて雅俊 が題簽筆者の候補筆頭 であり、後柏原にも注 目しておく。	公条以外の五名の 「こ」が近い。雅俊 が題簽候補筆頭であ り、後柏原にも注目 持続。	雅俊・尚通の「き」の 字が近く、後柏原は遠 い。結論は、雅俊が題 簽筆者候補筆頭であ る。

以上の調査した範囲では題簽筆者候補は「ふ」「ま」「ほ」の一致の見られる雅俊となる。

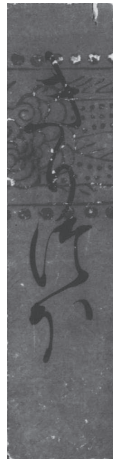
熊大本題簽「あふひ」



熊大本題簽「藤はかま」



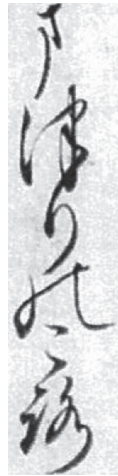
熊大本題簽「きりつほ」



吉川本花散里6ウ②の「給ふも」



吉川本花散里2ウ①「まつりのころ」



吉川本花散里1オ③の「おほかたの」



雅俊とともに最後まで名が上がっていた邦高・尚通を加え、念のため、この三人の「す(寿)」「あ」「み(見)」の三字について調査し、その調査結果を次に表示する。

「仮名(「す(寿)」「あ」「み(見)」)の調査」

対象	「す(寿)」	「あ」	「み(見)」	考察
巻名(題箋)	うす雲・すゝむし	あふひ・あかし・あさかほ	みゆき・みのり	「み」は、三人とも似た字が見いだせる。
雅俊	(3ウ⑩)	(B1オ⑩、1ウ⑨)	(B4オ④、6ウ③)	「す」は、尚通が似ていない。三人のうち尚通が脱落。
邦高	(R1ウ⑤・2オ⑤)	×R1ウ⑧・2オ①	△R15ウ6▽ (R23オ⑤)	「あ」は邦高・尚通が似ていず、邦高も脱落。雅俊が残る。
尚通	×Z1ウ2 ³	×Z1オ3 ³	(Z3ウ⑥) ³	結論：三字の検討からは、雅俊が題簽筆者として残る。

以上の調査からは、題簽筆者として最も可能性が高いのは飛鳥井雅俊ということになる。

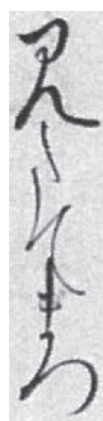
熊大本題簽「みゆき」



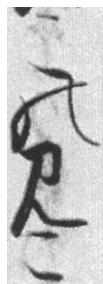
雅俊吉川本花散里4才④の「み」



邦高吉川本夢浮橋23才⑤の「みたてまつ」



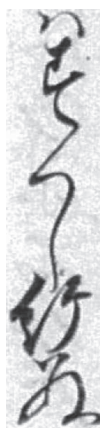
尚通吉川本桐壺3ウ⑥「このみこ」



熊大本題簽「うす雲」



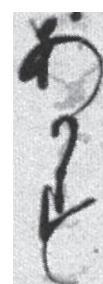
雅俊吉川本花散里3ウ⑩の「はすくし給はぬ」



邦高吉川本夢浮橋1ウ⑤の「すこし」



尚通吉川本桐壺1ウ②「あかす」



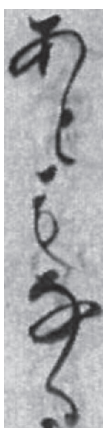
熊大本題簽「あさかほ」



雅俊吉川本花散里1ウ⑨「世のあはれの」



邦高吉川本夢浮橋7ウ①「あともなく」



尚通吉川本桐壺1才③「あらぬ」



(七) 紅梅本と熊大本の校異およびイ注

これについての精査はまだできていないので、上野氏のご調査にお任せすることにして、目に付いたことのみ述べる。

二本に本文差はほとんど見られず、行取り・丁取りの一致が多く見られ、字母も一致する場合が多いが、全く同一とまでは言えない。紙面から受ける印象も全く異なるので、上臈局本の敷き写しではないと判断さ

れる。

また、二本ではイ注の存在状況が異なっており、熊大本のイ注は少ししかないが、紅梅本には多い。紅梅本の欠である蓬生・若葉上での紅梅本のイ注の状況は分からないが、熊大本に該当の巻が存在しているので、何が分かるかを調査する。なお、紅梅本の補写の巻である総角にはイ注はない。

1 熊大本蓬生（紅梅本は欠冊）のイ注

熊大本蓬生 No. 712^①に一箇所あるイ注および他本の当該本文を挙げる。

熊大本……我御くしのおちたりけるをとりあつめてかつらに

（『大成』五三一頁^①）

耕雲本（『大成』による）……わか御くしのおち給へりけるをとりあつめてかつらに

肖柏本（『大成』による）……わか御くしのおちたりけるをとりあつめてかつらに

日大本（写真版による）……我御くしのおちたりけるをかつらに

三人の源氏研究の始発に用いられた耕雲本から肖柏本までは「とりあつめて」の本文はあった。おそらく、上臈局本の成立以前に実隆の用いた未詳本の「わか御くしのおちたりけるをかつらに」との校合をしての文明本への書入れが「六字イ無」である。この「六字イ無」の意味は、仮に「無」の書入れがないなら「この六字は異文扱いにする」の意であるので、本行の「とりあつめて」が削除され「とりあつめて」というイ注が付されることとなる。しかし、この例では「無」がある。よって、「この六字は異本にはない」という注記となり本文校訂には関与しない。書入文明本がどうであったかを書く

書入文明本……我御くしのおちたりけるをとりあつめてかつらに
であり、上臈局本では書入文明本をそのまま写したと推測され、それを写した熊大本が上記本文となっている。

しかし、日大本は「無」がないかのように、「とりあつめて」を削除した本文になっている。多くの書入があったであろう書入文明本は、永正三年¹⁵⁰⁶に甲斐国某へ売却したため、実隆は書入をした文明本そのもの

は手元になく、それを写した本に頼らざるを得なくなっていた。B本・C本・D本作成時^②は書本が南御方本（上臈局本）であり、上臈局本を写した熊大本が「とりあつめて」の本文であるので、書入の入った文明本に「とりあつめて」の本文があったことを明示している。それにも関わらず日大本は「とりあつめて」がない本文となっている（『大成』では、日大本も諸本と同じく「とりあつめて」があることになっているけれども）。指摘できることは、肖柏本・原態文明本・上臈局本で青表紙本化されていた本文箇所を日大本では後退させていることである。熊大本・紅梅本の親本である上臈局本（南御方本）が青表紙本化のピークであったことを、ここでも確認できる。

2 熊大本若菜上（紅梅本は欠冊）のイ注

熊大本若菜上 No. 1368^④に一箇所あるイ注および他本の当該本文を挙げる。

熊大本……ふちつほとときこえしは先帝の源氏にそ

（『大成』一〇二五頁^⑦）

耕雲本（『大成』による）……ふちつほとときこえしは先帝の源氏にそ
肖柏本（『大成』による）……ふちつほとときこえしは先帝の源氏にそ
日大本・実枝本（写真版による）……ふちつほとときこえしは先帝の源氏にそ
横山本・陽明本……ふちつほとときこえしはせんたいの源氏にそ

（保坂本）……ふちつほとときこえしはせんたいの源氏にそ

三人の源氏研究の始発で用いられた手沢本の本文（耕雲本）から日大本まで一貫して「先帝の源氏」である。上臈局本の成立（明応四年¹⁴⁹⁵）以前に横山本・陽明本・保坂本のいずれかとの校合が入り、書入の入った文明本は「……先帝の……」となっていたのであろう。

紅梅本・熊大本の二本の本行本文は同一視できるほどであるが、その差はイ注の数にあり、熊大本のイ注の各巻の数は、紅梅本よりも常に少ないか、同数に止まっている。この状況を熊大本の不備な奥書から推測して、熊大本筆者の不慣れな書写による脱落によるものと判断している。

熊大本が紅梅本に先んじて成立し、書写者の若書きであることからイ注の欠落がある場合が多いと推測する⁽²⁵⁾。熊大本の蓬生と若菜上には、イ注が一つずつ存在しているので、書写者が比較的丁寧な書写した卷々と判断され、紅梅本の欠を補いえる卷々といえそうである。

(八) 紅梅本と熊大本の書写技量の差

そもそも上臈局本は、書入れが多く入っていたであろう文明本を清書の書写した本と稿者は考えている。本文校訂を意図した校合に際し、まず採用したい新本文を傍記する。そして、元の本文を「イ注」として残したい場合は、傍記に対応する本行本文に「イ」添えておき、元の本文を残す必要がない場合はミセケチを入れるに留める。時の経過により書入れは増加するであろうが、これを清書的に書写する際には、傍記を本行に移し、「イ」を添えた本行部分をイ注として本行右へ書く。「イ」を添えずミセケチの付された部分は校訂のみするのである⁽²⁶⁾。この清書の書写によって、書入れは減少して紙面が美しくなる。清書の書写は、上臈局本において成され、それを書写したのが二本だから、二本が限りなく同一に近い本文を持っているのである。この二本の本文が同一に近いことから、書写者は少なくとも本行本文に関しては正確に写し取れている、と言える。

この本行本文を正確に写し取る能力のある書写者が、イ注に関しては、

時の経過とともに正確に写し取る能力を得た、と考えたい。つまり、二本に「本云」の有無の差があった奥書から導かれたのと同じ結果となるが、まだ書写技能が十分でない頃に熊大本がまず書写され、後年、書写技能が十分養われた頃に紅梅本が書写されたと判断するのである。

(九) 紅梅本の補写の巻「総角」と熊大本

紅梅本総角は補写の巻である。もし散逸した紅梅本総角が出現するとすれば、イ注箇所を除いては熊大本と同じ本文であるはずのだが、補写に選ばれた本がどのくらい似ているかは興味深い。肖柏本、補写本、熊大本を比較してみる。

総角の巻で、紅梅本（補写）と熊大本とに異同がある七箇所（次頁の表参照）がある。補写された本は、七箇所のうち肖柏本と六箇所で一致し、肖柏本に近い本である。また、熊大本とは一箇所も一致していないので、熊大本からは遠い。つまり、熊大本と同文であろう散逸した紅梅本からは遠いと判断され、補写された本は紅梅本の代替の本とはなりにくい。熊大本こそが紅梅本の代替となるであろう。

大成	肖柏本	紅梅本の補写の卷（総角）	熊大本
1589 ⑭	ことさへそひて	ことさへそひて	事さへ
1591 ⑭	き、をき奉りにしかは	き、をきたてまつりにしかは	き、をき
1603 ②	かくてのみすくし	かくてのみすくし	すくし
1608 ⑫	みるにおなしことなから	見るに	みるにおなし事なから
1619 ⑤	のたまへは心からとにく、そき、給ふ	のたまへは心からとにく、そき、給ふ	の給へは
1621 ⑪	ひさしく有へき物とも	ひさしくあるへき物とも	ひさしくもと
1636 ⑧	のほりくたりこきめくり	のほりくたりこきめくり	のほりくたり

三 上臈局本を書写した人物

実隆は文明本を作成し、その文明本へ青表紙本化を図って校合書入をする際には、元の本文にイと添え、校訂する本文をイ注化する部分の右側に書入れたと推測される。これを写し取る際には、右側の書入れが本行本文となり、イと書き添えられた元の本行本文が右側に出されてイ注となる。この校訂方法で書入れられた本を便宜的に「書入文明本」と仮称してきた。この書入文明本を写し取る際は、注意しながら清書的に書写することとなる。書入文明本を写し取った上臈局本は、注意の必要な

書写作業の末に、見事に写し取れたことは、実隆が手沢本を売却しそれを再現させる毎に上臈局本（南御方本）を書本にしていることから推測される。

この上臈局本を書本に作成された紅梅本と熊大本は、上臈局本の作成に比べれば、その書写作業は格段に容易であったであろう。しかし、生涯に二度も『源氏』を書写したことは、注目されていい。この注目すべき女性とは、いかなる人物なのであろうか。この疑問を解くための調査を開始するが、その手掛かりを与えてくれることになるものに若菜下の貼り紙がある。

(一) 紅梅本若菜下の貼り紙および貼り紙筆者の検討

紅梅本の三箇所には貼り紙がある。そのうちの若菜下の貼り紙の調査をする。

1 若菜下巻(大成¹¹⁵³③)にある貼り紙(紅梅本No.35—0039①⑦)

貼り紙の本文を掲出する。

さましたりノ次

御ことのふくろたゝみてひきかくしたるに

ほとんちいさくおはしませは中くさしやり給ふ程

もなくてうつくしう見えたまふ(傍線は稿者)

この貼り紙の真下の紅梅本(画像No.35—0040①⑦)を挙げる。ここの熊大本(画像No.1538①⑦)は用字行取りともに同文である。

(大成¹¹⁵³②) さくらのほそなかに御くしは左右よりこ

ほれかゝりてやなきのいとなさましたり

これこそはかきりなき人の御ありさま

なめれとみゆるに女御の君はおなしやう(傍線は稿者)

貼り紙に「さましたりノ次」とあるので『大成』にあたると、河内本系諸本と別本系の保坂本が紅梅本の貼り紙にはない「いと」を持っているが、その有無以外は同文である。

(大成¹¹⁵³河内本系校異③) 御ことのふくろたゝみてひきかへしたるにほとんちいさくおはしませはなかくさしやり給程

もなくてうつくしう見え給[河](傍線は稿者)

(大成¹¹⁵³別本系校異③) 御ことのふくろたゝみてひきかへしたるに

ほとんちいさくおはしませは中くさしやり給ほと

もなくてうつくしうみえ給[保](傍線は稿者)

紅梅本の貼り紙は、河内本系諸本と別本系の保坂本との酷似本文に該当している。この巻の耕雲本(高松宮家本)は河内本系一本であるので、「いと」の有無を無視すれば耕雲本に酷似しているともいえる。

この部分は、原態文明本が河内本系あるいは別本の保坂本に近似する本文であったことを示している。具体的にいえば、三人の源氏研究の土台にある耕雲本の本文を持つそれぞれの手沢本への校合書人があつて書入文明本の本文状況となるが⁽²⁷⁾、新本文を採用し、元の本文を異文注記化あるいは削除するという作業に際し、原態文明本から書入文明本への変化は、次頁に掲出したものようなものであつたと推測される。

この書入文明本を写し取つたのが上藤局本(紅梅本で代用)であるが、上藤局は、行間に書入文明本の三行分の本文を細字にて写し取つたであろう。紅梅本の筆者は、この行間の処理に戸惑い、人に任せようである。なぜならば、次項で述べる理由により、貼り紙筆者を異筆とみるからであり、貼り紙部分を書いた別人がいる。紅梅本の筆者は、貼り紙筆者にこの箇所の書写処理を指導してもらつたと推察される。なぜかという、若菜下と御法の貼り紙での教示をもとに、東屋に存在する貼り紙の方は自身で処理していると推察されるからである。なお、熊大本は貼

り紙を持たず紅梅本と本行本文は同文であり、上臈局本の行間部分に書かれていたであろう細字に注意を払わない書写態度が窺える。

原態文明本

書入文明本

<p>さくらのほそなかに御くしは左右よりこ ほれかゝりてやなきのいとのさましたり 御ことのふくろたゝみてひきかくしたるに ほとちいさくおはしませは中くさしやり給ふ程 もなくてうつくしう見えたまふ これこそはかきりなき人の御ありさま なめれとみゆるに女御の君はおなしやう (傍線は稿者)</p>	<p>さくらのほそなかに御くしは左右よりこ ほれかゝりてやなきのいと<small>以下三行イ</small>のさましたり 御ことのふくろたゝみてひきかくしたるに ほとちいさくおはしませは中くさしやり給ふ程 もなくてうつくしう見えたまふ これこそはかきりなき人の御ありさま なめれとみゆるに女御の君はおなしやう (傍線は稿者)</p>
--	--

2 紅梅本若菜下に存在する貼り紙の筆者について

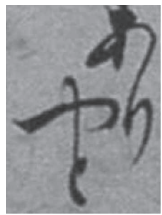
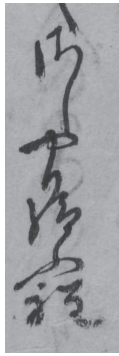
貼り紙の字が紅梅本の筆者とは異なると判断したのは、平仮名「や」に同筆とは言えない特徴を見いだすからである。紅梅本の筆者の「や」はそう特徴があるわけではない(以下「A」)が、貼り紙三行目に一字見られる「や」の終画は、運筆に影響されて随分右寄りに引かれている(以下「B」)。このBの特徴は、管見では、正徹本(国文学研究資料館蔵。解題に「近世初期の書写と目される」とある)に頻出、同じく近世の写本『風葉和歌集』の多くの本でも認められた。また、近世以前の写

本では大島本『源氏物語』(飛鳥井雅康筆)・吉川史料館蔵吉川本『源氏物語』桐壺25ウ④(近衛尚通筆)、高松宮家本『源氏物語』松風9才①・12才①・24才⑦・25才④(筆者実隆)などの他、「著到御懷紙 後柏原天皇宸翰」⑪(香川県立ミュージアム)の元長筆にも見られ、結構多くの用例を見いだせるが、圧倒的にAの用例が多く、Bの用例は少ない。

Bの用例がどれくらい少ないかといえば、吉川本の場合、邦高筆の夢浮橋では全二四丁足らずの分量に一例の出現も見られない。尚通筆の桐壺でも全三五丁の分量に一例の出現も見られないが、Bに近い例(運筆

がBと同じだが最終画自体は左よりに引かれているので「B」とすべきか）なら25才④にある。邦高筆・尚通筆のBの出現例の少なさに比して、雅俊筆の花散里では、全六・五丁足らずの少ない分量に一例（3ウ⑤）の出現が見られ、雅俊筆でのBの出現率が高いことが分かる。雅俊筆のBの出現率が高いことは、市立米沢図書館蔵『後撰和歌集』（極め、飛鳥井雅俊筆²⁸）No.115²⁰、No.117⁷をはじめとしてNo.123¹³、No.129¹⁰、No.131¹、No.131⁸、132⁶など多数の例が見られことから証される。

近世以前では、「や（B）」は、大島本『源氏物語』、高松宮家本松風の実隆筆、「著到御懷紙」の出詠者の元長筆に、吉川本桐壺の尚通筆にも存在しているが、雅康は永正六年¹⁵⁰⁹に死去しているので、また実隆は多忙であったことにより、三好元長は貼り紙の書かれた永正一七年には未だ上洛していないので、それぞれの貼り紙への関与は考えづらい。そして近衛尚通の関与も考えにくい²⁹ので、「二の（六）の3「熊大本の題簽筆者」での検討結果と考え併せて、若菜下の貼り紙の「や（B）」を、「B」の出現頻度が高い雅俊筆と判断する。さらに貼り紙の字「ひ」は、第一画を点で済ませるといふ雅俊筆の特徴が見られる。貼り紙の「ほ（本）」「ふ」の字形も雅俊のものとしてよく、貼り紙は雅俊によって書かれたものと判断される。



若菜下貼り紙の「さしやり給ふ程」 米沢本後撰集No.131①「ありやと」

さて、飛鳥井雅俊といえ、行幸に挟まれている付箋（本稿「三の（四）紅梅本の付箋から書写者を推測」参照）に紅梅本筆者として名が上がっている「榮雅女一位殿」、この人物の兄である。となると、紅梅本の筆者として「榮雅女一位殿」も有力候補となる。

（二）紅梅本御法に存在する貼り紙および貼り紙筆者の検討

1 紅梅本御法に存在する貼り紙

二つ目の貼り紙は御法（大成¹³⁹⁶⑨、紅梅本No.40—0027⑥）にあり、次のように書かれている。これを調査する。

○ おりからよろつのふる事おほしいて
られてなにとなくその秋のことこひしう
かきあつめこほる、なみたをはらひもあへ
たまはぬまきれに（傍線は稿者）

この貼り紙の真下（大成¹³⁹⁶⑨、紅梅本No.40—0028⑥）に

ぬれにし袖に露そをきそふ○御かへし
露けさはむかしいまとおほゝえす
おほかたあきのよこそつられけものゝみ
かなしき御心のまゝならはまちとり

とあり、貼り紙本文は、肖柏本（大成による）

おりからによるつゝの事おほしいて
られてなにとなくその秋のこと恋しう
かきあつめこほる、涙をはらひもあへ
給はぬまきれに（傍線は稿者）

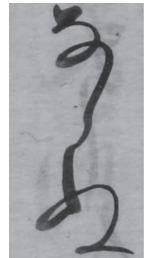
と傍線部に「ふる事（貼り紙）―事（肖柏本）」の校異が見られるものの他の部分は一致している。つまり、貼り紙の本文は肖柏本と酷似している。

ここも、原態文明本が肖柏本と酷似した本文であつたことを示しており、原態文明本を青表紙本化するための切り出しの行われた箇所であり、切り出した部分が貼り紙となつていたのである。青表紙本系の中にとどまらず校本全体の中で肖柏本のみがこの近似本文であるが、書陵部本は正に貼り紙の本文と同文である。書陵部本が文明本の青表紙本化に到る前段階の本文であることが注目される。肖柏本・書陵部本が何に拠ったかは、耕雲本・正徹本が貼り紙の本文を持たないのでこれらではない。

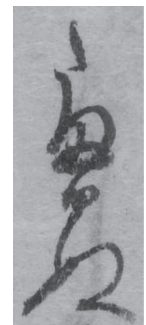
2 紅梅本御法に存在する貼り紙の筆者

貼り紙の「ぬ」と紅梅本の「ぬ」に違いが見られる。紅梅本の「ぬ」は結びが下方にあるが貼り紙の字は標準的な位置で結ぶ、という違いである。貼り紙の「ぬ」は、米沢本後撰集に多く見られる「ぬ」の字形と一致するので、御法の貼り紙の筆者も雅俊としてよいであろう。

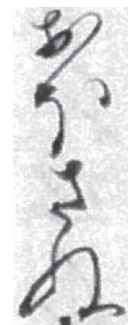
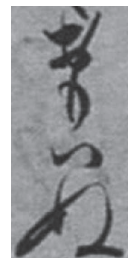
紅梅本 No. 40 | 0027 ⑫ 「ならぬ」



貼り紙 4 行目 「たまはぬ」



雅俊米沢本後撰集 No. 9 ⑭ 「おもはぬ」 雅俊吉川本花散里 6 ウ ② 「おほさぬ」



（三）紅梅本東屋に存在する貼り紙についておよび兼良本

紅梅本にもう一つある貼り紙について検討したいが、この貼り紙の字は検討するまでもなく書写者の字である。ただし、貼り紙の真下に一箇所補入があり、この補入の字は検討を要する。

1 紅梅本東屋に存在する貼り紙の真下にある補入の字の筆者

貼り紙をめくり上げると紅梅本 No. 50 | 0039 ④ の補入印の横に補入文「めさましや」がある（次項「2」の「熊大本」と対照した「紅梅本」部分参照）。この字を筆者の字としていいかどうかの検討をする。

この補入文のうちの「さま」の二字に注目する。まず、比較すべき字は、若葉下貼り紙一行目に「さましたりの次」とある「さま」があつた。これは、すでに雅俊の字とした。もう一つ比較すべき字を探すと、補入文と同じ紙面にある。欄外に記された○印の直前の文「おはせしさま」か

ら「さま」を選ぶ。こちらの「さま」は紅梅本筆者の字である。若菜下貼り紙の雅俊筆「さま」の字と、紅梅本筆者の字とどちらに東屋の貼り紙にある補入の字が似ているかを見比べればいい。

雅俊の字は勢いのある運筆であり、紅梅本の字は落ち着きのある運筆である。補入の字は、明らかに後者である。この補入は、紅梅本筆者が書いたものであり、上臈局本にあった補入を写したか、書写時に脱落させた本文を点検時に補入したかのいずれかであるが、紅梅本だけに見られ、熊大本にはない。紅梅本の脱落であるなら熊大本にその本文があるはずなのではない。このことから、上臈局本にあった補入を紅梅本は写し取り、熊大本は写し落としたと考えられる。

また、この補入箇所からは、「紅梅本・熊大本の二本ともにある書入れが上臈局本にあった書入れを写し取ったものであり、紅梅本だけにある

る書入れが後に書かれたもの」とは言えそうにないことが分かる。

2 東屋巻(大成1817②)の貼り紙(紅梅本No.50―0038)の本文

次の上欄に挙げる貼り紙部分の本文は、『大成』所載本のうちでは「池」に似ている。肖柏本のこの巻は青表紙本系とは認定されず、『大成』には所載されていない。肖柏本の写真版を見ると、池田本以上に貼り紙部分に似た本文を持っている。どうやら、文明本のある時点での本文が肖柏本に酷似していたことを示している。若菜下と同様これも、三人の手沢本を青表紙本化するにあたって、実隆の手沢本である文明本へはイ注化する本文にイが付された箇所であり、書入文明本を書写した上臈局本ではイ注文とする部分が行間に出された箇所である。紅梅本では、ここでも行間の処理を貼り紙としたのである。

貼り紙(大成1817②、紅梅本No.50―0038)

宮はいとなさけなけに見にく、こそみえ給しか

とりはなちてはいつれもともかくもわかれす

かたちよき人は人をけつこそにくけれとの給へは

人くゝわらひてされとおまへにはをされたてまつら

さめり

肖柏本(写真版による)。行取りは紅梅本貼り紙に合わせている。

宮はいとなさけなけに見にく、こそみえ給ひしか

とりはなちてはいつれもともかくもわかれす

かたちよき人は人をけつこそにくけれとの給へは

人くゝわらひてされとおまへにはをされたてまつり給は

さめり

肖柏本の「り給は」が貼り紙の「ら」に対応し、この部分を除いては完全に一致している。若菜下の貼り紙の例から考えると、書入文明本にイ注化する指示があったと推測される箇所であり、この貼り紙の真下の

紅梅本の本文（大成1817②）を上欄に、これに対応する熊大本の本文を下欄に記し、次に示す。なお、紅梅本には当該の行数を冠しておく。

紅梅本（大成1817③、写真No.50—0039②）	熊大本（写真No.2430②）
<p>② ねときこえあへりむかひておはせしさま○</p> <p>③ いかはかりならん人か宮をはけちたてまつら</p> <p>④ ん○^{めさましや}なといふほとにいまそくるまよりお</p> <p>⑤ り給なるときくほとかしこましままで</p> <p>⑥ をひのゝしりてとみにもみえたまはす</p> <p>⑦ またれたるほとにあゆみいり給さまをみれ</p>	<p>ねときこえあへりむかひておはせしさま</p> <p>いかはかりならん人か宮をはけちたてまつら</p> <p>んなといふほとにいまそくるまよりおり</p> <p>給なるときくほとかしこましままで</p> <p>をひのゝしりてとみにもみえたまはす</p> <p>またれたるほとにあゆみいり給さまを</p>

欄外に書かれた補入印「○」に従って貼り紙部分を挿入すれば文明本のもとの本文に戻ることが可能なのである。通常の処理ではイ注となるべきものである。この箇所を書写した紅梅本筆者は、若菜下で指導されたとおりの処置をした。まず、切り出した箇所を明示する若菜下での「さましたりノ次」という言葉に代えて、「おはせしさま」の次に位置を示す「○」印を欄外に書いた。そして若菜下での処置に倣って、イ注文とする本文部分を別紙に書き、これを貼り紙とした。なお、紅梅本にある補入文「めさましや」は熊大本にはなく『大成』にもないが、前掲の貼

り紙本文の欄の下に肖柏本文を示したが、それに後続する肖柏本（『大成』1817③、行取りは紅梅本に合わせている。）を挙げる。

いかはかりならん人か宮をはけちたてまつら
 んめさましや^なといふほとにいまそ車よりお
 り給なるときく程かしこましままで
 をひのゝしりてとみにもみえ給はす
 またれたる程にあゆみいり給へるさまをみれ（傍線は稿者）

肖柏本には、「めさましや」（傍線部）があり、この紅梅本に見られる補入文は肖柏本からのものと考えられる。そして、この補入文が上藤局本に既に存在していたことを、前項で論じた。熊大本に「めさましや」が見られないのは、書写者が書入れを脱落させているのである。

3 東屋の貼り紙の本文から推測する兼良本

三人共同の源氏研究での青表紙本化の過程で切り出された本文が若菜下の例では、まさに耕雲本酷似の本文であった。しかし、東屋の貼り紙の本文は、耕雲本（『大成』の高松宮家本）とは似ていない。これをどのように考えればよいのであろうか。

これについては、二通りのことが考えられるが、稿者は、②ではないか、と推測する。

①兼良が東屋を含む物語の終盤部を池田本（別本）で書き継いだ。

兼良がなんらかの事情で、五四帖の全てを書写し切れず、池田本で書き継ぎ、この書き継ぎの帖に東屋が含まれるということ想定できる。例えば、禁裏本作成の清水谷実秋による書写、あるいは文明書写本作成の甘露寺親長による書写が開始され、兼良の書写作业が中断されてしまった、ということが想定される。

②兼良が兼良耕雲本を池田本で校訂した。

兼良耕雲本は、『源氏和秘抄』著作時に既に青表紙本化された箇所が見られるので、兼良が校訂に意欲を持っていた、東屋のこの箇所を池田本で校訂した。その時期は、宗祇が耕雲本を写す以前のことであり、原態文明本は貼り紙の本文を持っていた、と推測する。貼り紙のこの部分は、青表紙本化によって切り出されたのであろう。肖柏手沢本の流れを

汲む肖柏本においては、何らかの事情で青表紙本化に漏れた四帖が生じ、その内の東屋に、池田本に近い本文を三人のかつての手沢本の本文として伝えているのであろう。

なお、池田本の東屋は、『新天理図書館善本叢書 第13巻 源氏物語 池田本 一』の解題に拠ると、基幹巻（青表紙本系）に取り合わされた室町中期写のものである。

（三）『実隆公記』の記事から上藤局本を書写した人物を推測

永正一七年¹⁵²⁰四月一七日条『公記』に次のようにある。

新大典侍源氏本沽却 遣良椿了

新大典侍源氏本が実隆の仲介で売却されることになり、購入者のもとへ届けるべく良椿に託されたのである。

当時の天皇である後柏原の後宮に出仕していた者のうち、新大典侍（新大納言典侍）の該当者は、明応九年¹⁵⁰⁰一〇月二五日に任じられた藤原（勸修寺）藤子（勸修寺教秀女）である³⁰。

教秀には女が四人あり、一人は後土御門天皇後宮の房子（明応九年一〇月一三日に落飾、新典侍尼と称す）、房子の妹は後柏原天皇後宮の藤子、藤子の妹は実隆の妻であり、残る一人は今出川公興の配偶者である。紅梅本・熊大本の親本である上藤局本（南御方本）を作成した人物は今出川教季女であり、今出川公興は教季男である³¹。つまり、南御方・今出川公興・公興妻（教秀女）・藤子（教秀女）・実隆妻（教秀女）・実隆、これらの人々は姻戚関係にある。藤子の所持本を実隆の世話で売却するのも道理である。

応仁の乱を経ての父後土御門時代の財政逼迫を引き継いだ後柏原天皇

は、踐祚後二二年目にやつと即位式を挙げることができたという厳しい財政状況にあったことで有名である。天皇家では中宮・皇后をおかなかった。後宮に上臈女房として入った者のうち、子を儲けた上臈の中から妃化していった⁽³²⁾のだが、新大典侍藤子は後奈良天皇の生母となり、准三宮に叙せられた実質上の妃である。新大典侍本が売却されたのは、即位礼のあった大永二年¹⁵²²の約二年前であり、売却は、多額の出費に備えてのことであつたろう。『公記』の記事から紅梅本・熊大本の書写者を推測すると、それは勸修寺藤子となる。

勸修寺藤子（寛正五年¹⁴⁶⁴（天文四年¹⁵³⁵）が源氏本を売却した永正一七年時は、五七歳である。熊大本の筆跡は若書きを思わせるので、上臈局本が成立した明応四年¹⁴⁹⁵をそうも時を下ることなく書写したのであろうか。しかし、上臈局本の成立時の藤子は既に三二歳であり、三二歳以降に熊大本を書写したことになるので疑念が生じる。当時の三〇歳代の人の書いたものを若書きとは評しにくいからである。書跡から受ける印象と藤子の年齢が食い違う。藤子は書写者ではないと考えるべきなのか。藤子が書写を依頼した別人がいて、その別人が年若い時に書写した可能性を考えるべきではないのか。こう思い巡らすと、紅梅本が書写者自ら書いた題簽を貼っていたのを思い出す。新大典侍本（熊大本）は、立派な題簽を持つ。実質上の妃の所持本に相応しい題簽が選択されたのであろう。新大典侍本（熊大本）は、藤子の所持本であつたが、書写を依頼された別人がいるのであろう。

（四）紅梅本の付箋から書写者を推測

行幸に書写者についての付箋が挟み込まれている。これについては上

野著二一六頁で取り上げられているので、転載する。

行幸巻に

榮雅女一位殿と申／筆にて候と京山田／久海被申候／〔川勝宗久は一位殿より古て□カあと也〕

（「一部分、後筆」）の付箋が夾まれている。古筆家による正式な極めでは無く、走り書きのメモのようなものである。該書が女筆であることから、山田久海や川勝宗久といった古筆家等の意見を心覚えにメモしたものかと推測する。

既に述べたとおり、紅梅本と熊大本の二本は、同一人物によると推測される書写本であるが、この付箋がいう書写者について検討したい。

書写者の情報を整理すると、前掲の付箋に三つの説が書かれている。

1 山田久海説

榮雅女一位殿である

2 川勝宗久説

榮雅女一位殿以前の人ではなからうか

3 付箋を書いた人物

榮雅女一位殿より後の人物である

1説と3説は断定しているのに対して、2説は断定的ではない。2と3の説は、1説の「榮雅女一位殿」が判断の基準になっていてその説に懐疑的である。この三説に従って、2説・3説に該当する人物を飛鳥井家で探したが、物語を書写した女性を探し出せなかった。飛鳥井家以外でも探したが、「大正大学本早蕨」の奥書に「延徳二年¹⁴⁹⁰一二月下旬三善氏女」が見いだしたが、書写者が上臈局本を二度も写していることから、上臈局本が写した文明本の持ち主実隆の周辺の人物、あるいは上臈局本の持ち主の周辺の人物が書写者として浮上するので、三善氏女である可能性は低い。二度も上臈局本の書写をしている事実を考えると、書写者の身分が南御方（邦高親王妃上臈局）より上位の人物でその意向が

通るのか、または、実隆あるいは伏見宮家に縁故があり再度の書写が実現したのか、のいずれかだろう。書写者を栄雅女一位殿とするならば、実隆との縁故を考えるべきか。

この栄雅の女が「一位殿」と呼ばれるというのは、何か特別の功績があり本人が「一位」に叙せられたのであろうか。この疑問については、答えてくれそうな史料を見つけ出せていないが、伊井春樹氏編『源氏物語注釈書・享受史事典』（以下『伊井著』）（東京堂出版、二〇〇一）の「安政元年1854七月」の項（七二頁）に

手鑑 表源氏扇面十二枚 土佐光信門人 雅親卿之女 飛鳥井一位殿筆無相違者也

裏源氏扇面十枚 石山師香卿筆 嘉永七 甲寅 年仲秋（住吉家鑑定控）とあるので、「栄雅女一位殿」は絵の世界では名がある人物として扱われている。また『日本人名大辞典』（講談社）の「一位局」の項に

（生没年不詳）戦国時代の画家。飛鳥井雅親の娘。永正（1504—21）のころ活躍。土佐光信の画風をまなび、物語や人物、扇合わせなどの絵をかく。「岩屋物語」の絵と本文もかいた。名は雅子。

とある。「一位殿」は、「一位局」とも呼ばれていたのである。現存する『岩屋物語』⁽³³⁾に熊大本・紅梅本と同筆のものが見つければ、二本の筆者は栄雅女一位殿と確定できる。試みに画像の公開されているものに当たったところ、該当しそうなものはなかったが、文学作品の書写の履歴が残っていることから、一位殿が書写者である可能性はある。さらに、「三の（一）の2 紅梅本若菜下に存在する貼り紙の筆者について」で述べたとおり、飛鳥井雅俊が若菜下の貼り紙筆者と推定される。このことを考え合わせるならば、その妹が二本の筆者と考えてよいであろう。つまり、藤原（勧修寺）藤子は一位殿に書写を依頼した人物であって、新

大典侍本の筆者は一位殿としてよいのではなからうか。

雅俊と実隆は、廷臣として、また源氏本書写でも昵懇である。実隆が雅俊に書写してくれそうな人物を尋ね、雅俊がまだ画家としては名が売れていない妹の一位殿を紹介したとすれば、

南御方↓今出川公興（南御方の兄）↓公興の妻（勧修寺教秀女）↓教秀女藤子↓教秀女（実隆妻）↓実隆↓雅俊↓一位殿

と、この新大典侍本（一位殿本①、熊大本が該当する）の成立に関わった人々の繋がりが見えてくる。この人脈によって、書本の借りだしも容易である。

上野著（二〇九頁）によると、『公記』は、明応八年1499七月から同一〇年二月まで長い散逸期間に入り、この辺の記事が確認できず、『再昌草』にも関連記事がない。新大典侍本（一位殿本①、熊大本）は、上臈局本（南御方本）が書写となった明応四年六月から五年位経過した明応九年1500ころに成立したのではなからうか。後に述べるように、一位殿を栄雅六一歳時の生まれと想定すれば、明応九年の時、一位殿は二四歳であり、藤子は四六歳になっている。これを遡ること四年に立筆したとすれば、一位殿が二〇歳の時ということになる。

（五）栄雅女一位殿

上臈局本を書写して熊大本・紅梅本を作成したと考えられる栄雅女一位殿について述べるに当たって、まず、父親の栄雅について触れておきたい。

1 飛鳥井榮雅

飛鳥井雅親（榮雅）（応永二四年¹⁴¹⁷）延徳二年二月二日（現行の暦では1491年一月三十一日）は、『新古今和歌集』撰者飛鳥井雅経を祖とする蹴鞠・和歌で名高い飛鳥井家の八代目であり、書道飛鳥井流（榮雅流）の祖である。和歌については、実隆の師であり、当時の歌壇を領袖としていた第一人者である。寛正六年¹⁴⁶⁵には勅撰集編纂の院宣が下ったが、応仁の乱に阻まれ実現できなかった。寛正元年¹⁴⁶⁰に正二位に叙せられ、同七年に権大納言になっている。文明五年¹⁴⁷³に出家して法名を榮雅とし、柏木と号した。享年七四。後継者が飛鳥井家九代目の息雅俊であり、榮雅一女に雅俊の姉（近衛政家の側室³⁴）、その妹に「一位殿」がいる。

2 一位殿

榮雅の子女として『尊卑分脈』には雅俊が記載されているのみであり、「女子」としての記載がない。生没不詳とされるこの女性が「二位」を冠して「一位殿」あるいは「一位局」と呼ばれる謎は解けそうもないが、出生をいつに想定するかに関しては、清少納言が元輔晩年の女であり、萩谷朴氏は元輔五九歳時の出生と推測されている（『枕草子下』新潮社）ことを参考にすれば、榮雅の応仁の乱での疎開からの帰京を勘案して六一歳時の出生と想定することも出来るが、これは下限である。また、画家の活躍の初期が谷文晁・平山郁夫などを参考にすると三〇歳くらいなので、活躍した永正の始めころに三〇歳前後となるように勘案すると、榮雅六一歳時の出生でよい。もつとも、遅咲きの画家とすれば、出生を二〇年位遡っても支障はなさそうではある。

既述したとおり、熊大本と紅梅本の二本はそれぞれが別々に上臈局本

を書写したものであり、まず、熊大本が成立し、歳月を経て紅梅本が成立したと推測したのは奥書の差からであった。加えて、筆跡が熊大本が若書きで紅梅本が年齢を重ねた字であると推測されるからでもある。

画家・物語書写者として世に出ていた一位殿は、榮雅流書道の創始者榮雅の息女として当然、書の腕があつたろうが、画業は、おそらく幼少より指導者についてのことで、土佐光信の画風とあることから、ある時点で光信門に入ったのではなからうか。歌壇を領袖してきた榮雅の女としては叶わないことではない。女の画家志望を受け入れ、おそらくは最高の教育が受けられるように配慮し愛育したのであろう。

飛鳥井雅有の『嵯峨のかよひ路』があることで知られるとおり、飛鳥井家と『源氏』との縁は古くからある。文明本の成立（文明一七年閏三月）後、『源氏』の書写が盛んに行われた頃には、飛鳥井家でも、宗祇による源氏帚木講釈の雅親の聴聞（同一七年六月二三日）や実隆への『仙源抄』の雅親による書写依頼（長享二年八月六日）など『源氏』への取り組みが見られる。遡って、雅親本人の著作『源氏要解』（応仁から文明末の成立）ほかもある。父雅親から家業を引き継いだ兄の飛鳥井家九代目雅俊も、『源氏』一部の新写（自家用かどうかは不詳）の件で若紫を実隆に依頼し（『公記』明応三年二月一七日程）、翌年二月一四日には帚木を実隆に書写してもらっている。

明応四年¹⁴⁹⁵上臈局本の成立した前後には、実隆本（書入文明本）を書本に多くの源氏本が生まれ、更にそれを書本とした本もあった。この評判の実隆校訂の源氏本を手に入れたかった人物の一人が、新大典侍藤子であつたろう。この希望は、一位殿に書写を依頼して叶えられた。一位殿は、絵師として自立したと推測される永正の世になる以前には、画業

の傍ら『源氏』などの書写に携わっていたのであろう。熊大本の写真版を見ての上野氏の口答発表⁽³⁵⁾で、用紙が薄いと報告されている。写本作りに最適の用紙が選択できていないことから、依頼者のそう潤沢でもない経済状況での書写依頼であり、書写賃も乏しかったことが偲ばれる。この時、一位殿は二〇歳代であつたろう。

永正期には絵師として名も売れたという。永正一七七年を数年遡る頃、新大典侍本（熊大本）が売却予定であると仄聞し、一位殿は若かりし頃の源氏書写を思い出す。今なら、画家としての収入も安定し、『源氏』作成に挑戦できる。一位殿は、家蔵の『源氏』があつたとしても、当然実隆が新しく作つた評判の『源氏』を写すことが願ひであつたろう。亡き榮雅は実隆の歌の師であつたが、だからといって父亡き今、当時の実隆には方々から書写依頼が入り、要望は容易には受け入れられない。実隆自身の本（書入文明本）ではないが、上藤局本を写すのなら、欲をいわずに実隆の本を写すのも同然である。かくて何年かかけて一位殿本②（紅梅本が該当する）がなつた。

一位殿本②は、一位殿本①での書写が十全のものではなかつた、という反省のもとに、装幀はともかく、上野氏のお考えのように、内容的には上藤局本の副本を目指して作られた⁽³⁶⁾。

一位殿を書写者とした場合、兄雅俊（五九歳）は永正一七七年¹⁵²⁰に周防に下向し、かの地で大永三年¹⁵²³（六二歳）に没しているの、貼り紙との関係からは、紅梅本（一位殿本②）の御法の巻までの書写は、永正一七七年ころには終わっていないからではない。

3 一位殿本①（新大典侍本・熊大本）の売却先

陶隆満（持長、安芸守、兵庫頭）が、永正一七七年に吉川本（吉川史料館蔵）を実隆に依頼して作成した。陶本ともいうべきこの本は、後に大内氏が毛利氏に下つた際に差し出され毛利氏所蔵に転じ、さらに毛利家から吉川家への嫁入りに持参され、ついには吉川家所蔵となつた、という流転の歴史を持つ。これに類して考えれば、一位殿本①が西国の誰かに売却され、流転の末、誰かが島津氏の軍門に降つた際に島津氏の所蔵に歸した、ということが想像される。西国の誰に一位殿本①（新大典侍本・熊大本）が売却されたかの特定は、今はできないが、いつの日か分かる日がくることが期待される。

なお、忠元が『源氏』を入手した時期としては永禄一〇年¹⁵⁶⁷に成立した『源氏物語聞書』などを著す頃よりは相当遡り、『源氏』に興味を持つ年頃であろう一五歳（天文九年¹⁵⁴⁰）くらいの頃ではないか、と全くの想像を巡らしている。しかもその『源氏』が熊大本かと。

熊大本が閲覧禁止であるなか、映像が利用できたこと、紅梅本を披見できたこと、および上野英子氏を始め研究会の会員諸氏から多くの御教示を賜つたこと、これらを感謝してこの稿を終える。

注記

- (1) 「名古屋平安文学研究会会報」(第三四号、二〇一一・三)。
- (2) 吉岡曠氏「源氏物語本文の伝流」(『源氏物語研究集成』第一三卷、風間書房、二〇〇〇) 四一頁において、青表紙本と河内本との消長について「兼良を境にして、兼良と同世代ないしは次世代の飯尾宗祇・牡丹花肖柏・三条西実隆らがいつせいに青表紙本に肩入れして以来、河内本は急速にその地歩を失い…」と書いておられる。
- (3) 識語の翻刻に際し、上野英子氏の御教示を賜った。
- (4) 重松裕巳氏「中世末期武将の連歌——新納武藏守忠元の場合——」(『連歌俳諧研究』一九六二・七)
- (5) 白井忠功氏「『新納忠元上洛日記』について」(『立正大学人文科学研究所年報』二四号、一九八六)。
- (6) 「新出資料紅梅文庫旧蔵本を中心とした三条西家本源氏物語本文の再構築に関する研究」月例研究会」での上野英子氏の口答発表(二〇二一・八・二九)によると、家康と対面した際に『源氏物語』が話題に上ったからではないかとされる。
- (7) 注(6) 所載の上野英子氏の口答発表(同日)による。
- (8) 注(6) 所載の上野英子氏の口答発表(同日)では二筆とされ、そのうち一筆は紅梅本と同筆とされる。
- (9) 注(6) 所載の上野英子氏の口答発表(同日)の論文化で結論が変化する可能性があるので、ご論文を拝読して、なおよく考えたい。
- (10) 本報告書に所載。
- (11) 紅梅本の内、横笛および欠冊の蓬生・若菜下、後補の総角を除く五〇帖についての調査結果である。
- (12) 熊大本の内、二〇帖についての調査結果である。
- (13) 上野英子氏「紅梅文庫旧蔵本源氏物語「若紫」巻解説・影印—付、新出定家四半本「若紫」と三条西家本との位相に関する考察」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』第四〇号、二〇二一・三)「
- (14) 注(13)に同じ。
- (15) 「梶井蜻庵色紙」の名称は、金山極札に「梶井殿蜻庵おもふとち」とあるのに依る。所収されているのは、実践女子大学文芸資料研究所蔵『古筆手鑑 筆陣』である(上野英子氏ご教示による)。
- (16) 竜を描く題簽については、上野英子氏から既製品が江戸時代には存在した旨ご教示頂き、本稿に掲載するために、復元模様および他の資料などの提供を受けた。さらに沼尻利通氏から、酒井茂幸氏著『禁裏本歌書の書誌学的研究——蔵書史と古典学』(新典社、二〇二一)にも竜模様の題簽を貼る本の写真が掲載されている旨を御教示頂いた。
- (17) 藤本孝一氏は、「大島本源氏物語の書誌的研究」(『大島本源氏物語別巻 大島本源氏物語の研究』角川書店)において、現在の表紙は、江戸時代の校訂に際して換えられたものであるとし、「江戸時代前期から中期にかけての補修の表紙」としておられるので、題簽もその頃のものとお考えのようである。
- (18) 上野英子氏著『源氏物語 三条西家本の世界——室町時代享受史の一様相』(武蔵野書院、二〇一九) 二六四頁に解説がある。
- (19) 岡野道夫氏「吉川本源氏物語帯木巻の本文について」(『日本大学人文科学研究所研究紀要』第一六号、一九七四・三)
- (20) 注(19)に同じ。
- (21) 遠藤和夫氏「大内家伝来本『源氏物語』書写者の人々」科学研究費補

助金基盤研究(A) (二〇一〇年研究成果報告書 研究代表者豊島秀範『源氏物語本文の再検討と新提言』第三号、二〇一〇・三所収)

(22) 上野英子氏は注(18) 所載の前掲書で吉川本を「取混ぜ本」とされている。また、豊島秀範氏は吉川本について「ほとんどは青表紙本の本文でありながらも、河内本の表現を少なからず共有する傾向があった」

(『源氏物語』 本文の実態―「野分」 卷一― 吉川史料館(毛利家伝来・大内家伝来) 『源氏物語』を中心に」 科学研究費補助金基盤研究(A) (二〇一〇年研究成果報告書 研究代表者豊島秀範『源氏物語本文の再検討と新提言』 第四号、二〇一〇・三所収) とされている。

(23) 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院、一九七二)

(24) 拙稿「三条西家の家本『源氏物語』について」(『名古屋平安文学研究会会報』第三四号、二〇一〇・三) では、実隆は家本をA B C D Eの五本を作成し、A B C Dの四本を売却したことを論じている。最後のE本が日大本に該当し、A本が文明本に該当することになる。上野英子氏のご論ではBについては論じておられず拙稿と差があるので、次に、拙稿から図表を転載しておく。なお、B本についての論に教秀の勘返状を使用したもので、以下のことを書き添えておきたい。伊井春樹氏編『源氏物語 注釈書・享受史 事典』(東京堂出版、二〇〇一)

五一五頁に掲載されている『公記』 文明十八年二月十七日条の記事には誤りがある。教秀の勘返状は実隆の出した手紙の行間に書き加えられている方なので、所引の記事は実隆の出した手紙である。手紙の行間の記事、即ち勘返状の部分が欠落している。

枝	実享	E	D	C	B	A	書写開始	書写完了(年齢)	売却(売却先)	Aとの関係
枝	享祿2・4・5	享祿2・11・10	永正17・3・17	永正9・6・13	永正3・9・5	文明9・7・11	以前か	同17・閏3・21	永正3・8・22	A
以前	天文2・6・下	享祿4・2・23	同18・10・16	同11・11・19	同3・閏11・21	(実隆31歳)	(佐々木四郎)	(甲斐国某)	(未調査)	A ²
(実枝23歳)	／	(実隆77歳)	(実隆67歳)	前(実隆60歳)	(実隆52歳)	同9・1・22	同17・3・7	同11・11・19	同17・3・7	A ²
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／

(Aに付された数字は書写の重ねられた回数を示すものであり、同じ数字であっても、本文が同一であることまでは保証しない)

(25) 注(6) 所載の上野英子氏の口答発表(同日) で、「二本に共通の書入

れこそが上藤局本に存在した注」とされたが、紅梅本にだけあって熊大本にはない補入の例で、その補入が上藤局本に既に存在していたと考えられることを、「三の(三) の「1 紅梅本東屋に存在する貼り紙の真下にある補入の字の筆者」で取り上げ論じている。

(26) 拙稿「三条西家本『源氏物語』の実隆による校訂―本注と本無注をめぐって―」(『中京国文学』三一号、二〇一二・三) で論じている。なお、七五頁下欄の「9」の例を削除する。

(27) 本書所収の拙稿「宗祇・肖柏・実隆の『源氏物語』研究」で論じている。

* 桐壺と夢浮橋を含む7冊

- (28) 市立米沢図書館「収蔵文化財総合データベース」で画像が見られる。
- (29) 飛鳥井雅俊の姉が近衛政家の側室であった(注(23) 所載の井上氏著)が、政家の没年(永正二年¹⁵⁰⁵)から時を隔てて成立した紅梅本の貼り紙に尚通が関与したとは考えにくい。
- (30) 松蘭齊氏『中世禁裏女房の研究』(思文閣出版、二〇一八)。
- (31) 注(6) 所載の研究会での口答発表時に上野英子氏より御教示頂いた。
- (32) 注(30)に同じ。
- (33) 他の文学作品の書写には、伝飛鳥井雅子筆『伊勢日記』がある。
- (34) 注(23) 所載の井上氏著書。
- (35) 注(6) 所載の上野英子氏の口答発表(同日)による。
- (36) 注(13) 所載の上野英子氏の論文。

